ギミックとしての認知症　―村上春樹『１Q84』『騎士団長殺し』―

米村みゆき

Dementia as a Gimmick: Haruki Murakami's *1Q84* and *Killing Commendatore*

Miyuki Yonemura

Abstract

This paper discusses the representation of dementia in *1Q84* and *Killing Commendatore*. First, I consider the representation of dementia in modern Japanese novels to confirm how patients with dementia are otherized and their inner mental state is rendered absent, in addition to focusing on the fear of dementia on the side of caregivers, as particularly represented in Sawako Ariyoshi's *The Twilight Years.* Next, Haruki Murakami's *1Q84* and *Killing Commendatore* are analyzed in terms of how dementia is used as a gimmick to represent things that would normally be dismissed as delusions or mysterious phenomena. The main characters believe that dementia patients are conscious, but in both novels the patients themselves are portrayed as animals and plants nonetheless. Furthermore, the inner world of the patients is depicted as mysterious, and moreover, it brings special power. While the dementia described by Haruki Murakami functions as a gimmick to summon an unreal world, similar gimmicks also can be seen in characters with disabilities. In this respect, the novels are sparse on details particular to dementia as a real neurodegenerative disorder.

1　問題の所在

日本の近現代小説では、数々の介護の風景が描かれてきたが、村上春樹の描く『１Ｑ８４』（2009~2010 年）および『騎士団長殺し』（2017 年）に、認知症を患う人物の風景が描かれている事実に、どのくらいの読者が目をとめているだろうか。『１Ｑ８４』では、主人公・天吾の父親が千倉にある認知症を専門とする療養所に入所しており、天吾は「混濁」した意識の父親に付き添っている。『騎士団長殺し』では、主人公の「私」が仮住まいするアトリエ――そこが同小説の舞台となるのだが、持ち主である画家・雨田具彦は、認知症の進行のため伊豆高原にある養護施設に入居している。認知症の風景は、現代の高齢化社会を反映した小説の題材として考えるべきなのだろうか。

私たち読者の多くが、現実社会の出来事に深く影響を受けた村上春樹の小説として思い浮かべるのは、村上の「震災後文学」――村上が生まれ育った阪神淡路大震災をモチーフとした連作集『神の子どもたちはみな踊る』だろう。「蜂蜜パイ」以外の5編はいずれも初出は『新潮』に掲載され、副題は「地震のあとで」であった。だが、その「震災」のイメージはむしろメタファーとして機能しており、登場人物が心に負う傷を示唆し〝現実社会の反映〟という鋳型からは溢れるものとなっている。それは、たとえば東日本大震災を経て『バラカ』(2016)を描いた桐野夏生の手法と比較すると明らかだろう。桐野は、現実社会の問題と小説との関係について次のように述べる。作家は虚構性を強度にすることで、小説は「現実」よりもリアルな表現となる、現実の実相に迫り現実を照射する、と。小説の虚構が現実に拮抗するからこそ、現実の社会にとって小説が必要とされるというのだ[1]。だが、村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』が描く〝現実〟と虚構の関係性は、桐野のような、現実に拮抗する虚構性を目指す方向性とは異にするようだ。

連作集『神の子どもたちはみな踊る』において「震災」は「神戸の地震」として表現されているが、表題作の短編「神の子どもたちはみな踊る」を取り上げてみても、「震災」は現実の物理的な出来事というよりも、登場人物が抱える心の闇、危機的な状況のメタファーとして機能する。このことに注目してよいだろう。そしてさらにいえば、村上の『神の子どもたちはみな踊る』の舞台を米国ロサンジェルスに移し替え、アメリカ映画として脚色したロバート・ログヴァルが、やはり「震災」の意味を主人公の不安、多民族国家の中で個人のアイデンティティの確立が「(代理の)父」を失うことの危機意識として描いたことは興味深い。小説から映画というメディアに置き換えられたときのアダプテーションと翻訳を通じたローカリゼーション(現地化)によって、村上のメタファーが担うものもまた変更させられていることは、特記すべき事柄だろう[2]。では、『１Ｑ８４』および『騎士団長殺し』における認知症の表現は、どのような文学的な意味を担っているのだろうか。

『１Ｑ８４』では、パラレル的世界が展開され、実在とされる1984年と1Q84年の歴史が交錯する一方で天吾の父親が認知症となり、天吾の出生の〈謎〉が解明されようとする。『騎士団長殺し』では、認知症を患う高名な画家・雨田具彦の未発表の絵画「騎士団長殺し」の〈謎〉が物語の牽引力として設定され、小説は「騎士団長殺し」の“絵解き”の様相を呈している。両者とも〈謎〉の創出は、天吾の父親および雨田具彦が認知症を患い、本人の内面が不可視とされる設定が重用なポイントとなっている。いわば、認知症は、小説のギミックとして使用されていると考えられる。

---

1 桐野夏生『白蛇教異端審問』文春文庫、2008年、岩川ありさ「「バラカ」から「薔薇香」へ」(『思想』2021年11月号)参照。

2 米村みゆき「「やみくろ」はどのように表象されるのか―『神の子どもたちはみな踊る』におけるフィルム・アダプテーション」(「石田仁志/アントナン・ベシュレール編『文化表象としての村上春樹』青弓社、2020年所収」)

本稿では、『１Ｑ８４』および『騎士団長殺し』の認知症の風景の考察を目的とするが、次章では日本近代文学における認知症の表象を外観し、３章で『１Ｑ８４』、４章で『騎士団長殺し』においてギミックとしての認知症の表現を掘り下げて考察したい。

２　認知症患者の他者化――日本近現代文学における〈介護小説〉の風景

日本の近現代小説における認知症表象の文脈では、認知症（せん妄）[3]の患者を前にしてケアを担う登場人物たちが右往左往する姿が数多く見受けられる。「初老」の夫婦（妻）が、八十代の父親を介護する有吉佐和子『恍惚の人』（1972 年）、作家の男性主人公が実父を介護する佐江衆一『黄落』（1995 年）、90 歳を前にした夫が若い日の妻への愛を回想しつつ妻を介護する青山光二『吾妹子哀し』（2003 年）、孫が祖母を介護するモブ・ノリオ『介護入門』（2004 年）、在宅介護でありながら、娘が兄の家に通って母親の介護をする東野圭吾『赤い指』（2006 年）などである[4]。これらの小説は、どこで、どのような立場から認知症患者のケアをするのか、そこでどのような葛藤が生じるのかを読者に伝えてきた。たとえば『恍惚の人』では介護にあたる息子・信利が認知症（せん妄）の父親から強盗扱いされたように、ケアをする主人公たちは患者の被害妄想（金銭を盗んだ etc.）の対象となって罵倒される。あるいは、『吾妹子哀し』の夫・圭介のように、妻による記憶の喪失に戸惑う。患者のケアをするのは、嫁、子供、配偶者が多いのだが、認知症の様々な症状が、「病気」がもたらすものと理性的に理解しつつも、患者が身内であるがために感情的になり、患者に向けて自らの感情をぶつけ自己嫌悪に至る。いわば小説の読みどころは、ケアを担う者たちが苦慮する気持ち＝ケアする側の〝内面描写〟であった。あるいは萩原浩『明日の記憶』（2004 年）のように、若年性アルツハイマーである主人公がまわりから記憶障害を利用され金銭を二重取りされる場面など読者は、騙されてしまう主人公に歯痒さを覚え、割り切れない思いを寄せる。すなわち、認知症が登場する小説では、認知症患者の内面はほとんどわからない、不可視であるという設定ゆえにこそ、多くのドラマが生れることになった。

では、内面が不在の患者はどのように描かれるのだろうか。その特徴として第一に、認知症患者は「他者」となること、もはや自分たちが知っていた親や配偶者などの〝身内〟ではなく、理解が不可能な存在として立ち現れてくることである。たとえば、丹羽文雄『厭がらせの年齢』（1947）は、かつては可愛がった孫から厄介払いされる 86 歳のうめ女についての話である。夜になると「盗人」のように家の中の様子を窺い、金銭を盗み、もはや「ごはんばかり食べるお化け」となっている。現在の認知症の症状と思われるが、孫の夫の伊丹は、うめ女の行動を「万事

---

[3] 本稿では、小説内で痴呆症、認知症（アルツハイマー型認知症、血管性認知症など）、あるいはその症状と見受けられるものを認知症として記しているが、現代の医学の知見では「せん妄」「見当識障害」など厳密には定義が異なる症状であることを断っておきたい。

[4] 小説ではないが、母親の介護をエッセイで綴る落合恵子『母に歌う子守唄』（2004 年）などは新聞に連載され話題となった。

が嫌がらせとしか思えない」という[5]。なかでも、家族が認知症となり〝他者〟となってゆくプロセスを描いた小説は、有吉佐和子『恍惚の人』だろう。

この小説は、それまで漠然と捉えられていた「老人性痴呆」「老人介護」の問題を、先見的に描いたことで世評を博し、二百万部を超える空前のベストセラーとなった。この売れ行きによって、版元の新潮社では新設の社屋である通称「恍惚ビル」が建ったほどであった。ベストセラーの二百万部という数字は、ふだんは小説を読まない人々も同小説を手にとったことを示している。そして『恍惚の人』は、小説の中の話にとどまらず、現実の社会――高齢者福祉行政にも影響を与えてゆく。有吉佐和子は同書によって得られた印税の一億円を老人ホームに寄付したのだが、八千万円の税金がかけられたことを訴えた。そのため、政府は社会福祉施設に対する寄付を免税にする方針を採ることになった。また、小説家の井上ひさしは、シルバーシートの設置、都営バスの老人無料パスの交付なども、この小説が巻き起こした世論の風圧に後押しされたことだったという[6]。

『恍惚の人』という小説において「老人性痴呆」（現在の認知症）が、どのように描出されているかを見てゆくと、患者の茂造を〝他者化〟していることがわかる。認知症の症状を見せ始めた茂造は、昭子・茂利夫婦の実父・義父であるが「おじいさん」「おとうさん」等の親族呼称ではなく、語りの視点による「茂造」ですらない。小説では冒頭部分、昭子の義母が急死した場面を見たい。

> 夫婦は互いに眼を外らし、見ぬようにしながら、まだ生きている老いた男を見た」[7]　（二）

奇妙な行動をしてゆく茂造は、夫婦にとってすでに見知らぬ「男」となっている。その後、茂造の症状は進み、家族に〝醜態〟をさらすようになる。茂造が食事をする場面と「体操」をする場面を見てみたい。

> それから暫くの間、みんなが茂造の蟹の食べ方を黙って観察することになった。左の手と箸を使って、茂造は実に丹念に蟹の身を取り、白い肉を口に投げこみ、黙々と食べている。ときどき、ぺちゃッ、ぺちゃッと舌が鳴る。蟹の殻が次第に積上げられて行く。それは生きるための凄惨な儀式のようだった　（四）

> 彼の体操なるものは、原始人の祭りより醜悪な踊りに見えた。滑稽感さえもそこにはなかった。

---

5 安岡章太郎『海辺の光景』（1959 年）は、主人公が母親の危篤の知らせを受け、高知県の病院に赴く話であるが、狂気で入院する母親の病状も認知症の症状として読まれてきた。

6 井上ひさし「ベストセラーの戦後史 29」（『文藝春秋』1995 年 4 月）

7 引用における傍点強調は断りがない限り、引用者に拠る。以下も同じ。

（中略）

「ひゃぁ、ふゃぁ、ひゃぁ、ふゃぁ」と怪獣の断末魔に似た声をあげて、体操を続けている。（十二）

『恍惚の人』では、「耄碌」した茂造が月の美しさについて発言したり（七）、泰山木の花に心を奪われる行動が点綴されている（十五）。 しかし、上記の食事や体操の場面のように、茂造を冷静に捉える眼差しの存在に気づかされる。食事の場面では、「自分が老いたなら、決して若い者とは一緒に食事はするまい」（四）と考える息子の信利の内面に焦点化されるが、語りは茂造の心のうちは決して言及しない。オノマトペが効果的に配置された茂造の食事や体操の風景は、家族たちにとって茂造が得体のしれない存在になっていることを表している。そして、その後の茂造は、骨壺に入った妻の骨を食したり（十四）、自分の排泄物を部屋に塗りたくる（十六）など、理性を失ったような存在として描かれる。この小説では、夫婦の家を訪れた老人福祉指導主事が、嫁の昭子さえ聞き慣れない「特別養護老人ホーム」という施設について説明するのだが、それは寝たきりや「人格欠損」の高齢者を収容する施設となっている。すなわち『恍惚の人』では、茂造を「人格」を「欠損」してゆく存在として描いていよう。そしてそれは、認知症を患う人を徹底的に他者化することで可能な表現となっている。

では、『恍惚の人』で、茂造を徹底的に他者化した狙いは何であったのだろうか。茂造の立場に立つ視点、寄り添う視点は、ほとんど見受けられない。それは、この小説が、老いや死ぬことの不安ではなく、茂造の姿を通じて老いて〝醜態〟を見せることの不安を描いているからであろう。息子の信利は次のように考えている。

「やがて遠からず自分にも同じ運命が待ち受けていると思わずにはいられない」（十三）

「ただ老いるだけならいい。（中略）そして朽ちるのが死を意味するなら、これも自然だ、感受したい。しかし、（中略）そこで醜い姿をさらしながら饐え腐っていくような、そういう枯れはぐれ、朽ちそこないにはなりたくない。枯れたら潔く地に落ちて死にたいものだ」（十三）

茂造の〝醜態〟を目の当たりにした信利は、茂造を自分の延長線上の映像として捉え、畏怖する。老いて醜い姿を見せる不安を描き出すこと――これが、この小説の狙いであったと考えらえる。そのために、茂造を徹底的に他者化する表現が必要だったのだろう[8]。

3　『１Ｑ８４』の天吾の父親――ギミックとしての認知症

[8] 米村みゆき「高齢社会の「解釈」を変える――有吉佐和子『恍惚の人』と〈現実〉の演出」（米村みゆき・佐々木亜紀子編『〈介護小説〉の風景　高齢社会と文学　増補版』（森話社、2015 年）参照。

小説がフィクションである限り、認知症の症状が小説内において文学的な装置として機能するケースは少なからずあるだろう。有吉佐和子『恍惚の人』では、認知症/せん妄の症状は、主人公である初老夫婦の「老いへの不安」を演出することであった。では、村上春樹の『１Ｑ８４』および『騎士団長殺し』においてはどうであろうか。

村上春樹の両小説では、認知症は、物語を強固に牽引する装置となっているようだ。結論を先取りすれば、『１Ｑ８４』および『騎士団長殺し』で描かれた認知症は、いずれも、通常の感覚では共感しにくい不可思議な現象、通常では「妄想」と片付けられるような事柄を召喚するものとなっており、さらにいえば、真実へと辿り着くための手段となっているようだ。

村上の両小説では、『嫌がらせの年齢』『恍惚の人』と同様、認知症患者は〝他者〟として描かれ、身内の者にとって理解が不可能な存在となっている。しかしながら、『嫌がらせの年齢』『恍惚の人』と比較するとき、村上の両小説においては、認知症患者の内面を不在としているのではなく、その内面を想定しているところに大きな特徴がある。以下、『１Ｑ８４』において検討してゆきたい。

> 「お父さまはまだ六十代です。老衰するような年齢ではありません。それに基本的には健康な方です。認知症以外には、これという持病も見受けられません（後略）」
>
> （BOOK２、第 22 章）

昏睡状態におちいった主人公天吾の父親の症状について、医師が説明している場面である。

天吾は医師に、自分の語りかける言葉が父親に届いているのかと尋ねるが、医師はわからないと答える。父親は「昏睡状態」にあり、呼びかけても身体的な反応はない。しかし、医師は、深い昏睡状態にあっても、まわりの話し声が聞こえる人もおり、内容もある程度理解できることがあると説明する。天吾は医師に、父親の意識の有無について再び確認する。

> 「でも見た目ではその違いはわからないのですね」
>
> 「わかりません」　（BOOK２、第 24 章）

『１Ｑ８４』において、見た目＝「見せかけ」ではわからないこと、それを認知症の症状として描いていることは、注目されるのではないだろうか。なぜなら、それは小説のモチーフと深く関連しているからだ。

天吾の父親は、NHK の集金人をしながら男手で天吾を育て上げた。天吾が小学生のとき、父親の集金に同伴することを拒否し、それ以来二人の間には「冷ややかな空気」が流れている。天吾は父親のもとをほとんど寄りつかなくなった。父親は NHK を退職した後、「認知症患者のケアを専門」にする千倉の療養所に入った。そして、天吾は、二年ぶりに父親を訪ねようとする。

おれはこれから千葉県の海辺の町まで、認知症の父親に会いに行こうとしている。彼は息子のことを覚えているかもしれないし、覚えていないかもしれない。この前に会ったときだって、その記憶力はかなりおぼつかないものだった。今はおそらく更に悪化しているだろう。認知症には進行はあっても、回復はない。そう言われている。前にしか進まない歯車のようなものだ。それは天吾が認知症について持っている数少ない知識のひとつだった。（BOOK２、第８章）

父親との面会場面では、天吾の視点を通じて、父親＝認知症患者への他者化が働いている。

その窓際の椅子に座っている老人が自分の父親だとは、天吾にはすぐにはわからなかった。彼はひとまわり小さくなっていた。（中略）大きなとがった耳は、今ではより大きく、まるでコウモリの翼のように見えた。（中略）唇の両端がだらんと垂れて、今にそこからよだれがこぼれてきそうに見える。（中略）窓際にじっと座った父親の姿は天吾に、ヴァン・ゴッホの晩年の自画像を思い出させた。

その男は彼が部屋に入っていっても、一度ちらりと視線をこちらに向けただけで、あとは外の風景を眺め続けていた。離れたところから見ると、人間というよりは、ネズミやリスの類に近い生き物のように見えた。あまり清潔とは言えないが、それなりにしたたかな知恵を具えた生き物だ。しかしそれは間違いなく[9]天吾の父親だった。あるいは父親の残骸とでも言うべきものだった。（同上）

天吾の父親は、天吾のことが誰なのかわからない。息子であることも思い出せない。天吾に焦点化した語りは、「父親」を「その男」という呼称に変化させる。それは、父親の相貌が変化したことも起因しているだろうが、父親が自分を判断できない、自分にとって見知らぬ存在になっている理由が大きいのだろう。しかし他者化以上に、上の引用箇所が手酷い表現となっているのは、天吾にとって〝身内〟であるという意識が希薄であるためではないだろうか。そして天吾の父親における認知症の症状は、認知症に特有な記憶障害等の「病」のみに限定されていないようだ。次の箇所を見たい。

「私には息子はおらない」と父親はあっさりと言った。
「あなたには息子はいない」と天吾は機械的に反復した。
父親は肯いた。（同上）

このやりとりを通じて、天吾は次のように感じる。

9 「間違いなく」の箇所の傍点強調は原文ママ。

この男はおそらく今、真実を語っているのだ、と天吾は感じた。その記憶は破壊され意識は混濁の中にあるかもしれない。しかし彼が口にしているのはたぶん真実だ。天吾にはそれが直感的に理解できた。（同上）

さらに天吾は、この機会を逃せば父親の認知症が進行し真実を知ることができないと考える。そのため、天吾は子供の頃からずっと口にできなかった質問の口火を切ることになる。「あなたはつまり、僕の生物学的な意味での父親ではないということですね？　僕のあいだには血のつながりがないということですね」。しかし父親は、天吾の質問には答えず、ちぐはぐな受け答えをするのだ。父親が自分の質問の趣旨を理解できたかどうかもわからない。しかし、天吾はさらに質問を続け、一つの判断をする。

「母親は、僕が小さな頃に、病死したのではないのですね」（中略）母親はあなたのもとを去っていった。あなたを捨て、僕をあとに残して。おそらくはほかの男と一緒に。違いますか？」

父親は肯いた。「電波を盗むのはよくないことだ。好きなことをして、そのまま逃げおおせるものではない」

この男にはこちらの質問の趣旨はちゃんとわかっている。ただそれについて正面から話したくないだけだ。天吾はそう感じた。（同上）

ここでは、父親の「内面」は天吾の「解釈」に過ぎないものとして提示されており、逆の可能性、つまり父親は天吾の質問の意味を理解していない可能性も同時に示されている。しかし天吾は、父親にむかって、さらに訴えている。自分が父親に憎しみを抱き続けてきたこと、父親が「実の父親」でないと考えたこと、自分の出生について真実を話してくれれば、これ以上父親を憎む必要がないと。すると、父親の中で「変化」が現われたようにみえる。

父親は何も言わず、相変らず表情のない目で天吾を眺めていた。しかしその空っぽのツバメの巣の奥に、きわめて微小な何かがきらりと光ったような気がした。（同上）

父親の反応は、天吾が個人的に感じた（気がした）という語りのうちにあるため、「真実」は宙吊りにされている。だが、天吾は父親について「この男は空っぽの残骸なんかじゃない。ただの空き家でもない。頑強な狭い魂と陰鬱な記憶を抱え」「今はまだ空白と記憶がせめぎあっている」と判断する。病室を立ち去るときに再び、父親に話かけるが父親の反応はない。

父親の表情は変化を見せなかった。自分の言うことを相手が理解しているのかどうか、そもそも聞こえているのかどうか、天吾にはわからなかった。

（BOOK2、第 10 章）

しかし最後に病室を振り返ったときには、父親の目から一筋の涙がこぼれている。天吾は「父親はおそらく、わずかに残された感情のすべての力を振り絞ってその涙を流したのだ」と判断する。

繰り返せば、父親が意識を持ち、それゆえなんらかの反応をしたという反応は、天吾の想定内のこととして、「直感的に感じた」「気がした」「そう感じた」「おそらく」という語りとともにあり、厳密に区別されている。この厳密な区分けは、事実として断定しない言説だからこそ、認知症患者の中に〈謎めいたもの＝神秘性〉が召喚されるのだろう。

その後、父親は昏睡状態となり、天吾と言葉を交わすことも不可能になる。ただし、その「昏睡状態」は、医師によって医学的には病因が説明のつかないものとして表れている。いわば、『１Ｑ８４』における認知症の症状は、単なる病気のイメージに留まらず、さらに、謎めいたもの＝神秘性と密接に結びつくものとなってゆく点が着目される。具体的な場面を見てゆきたい。

天吾はその後、昏睡状態で死期が近い父親のために休暇をとり、千倉に滞在しながら付き添いをする。そして、眠り続ける父親の姿を見ながら、父親の頭蓋骨の内側は「余人の目には映らない」光景や記憶に囲まれているかもしれないと考える。さらには、天吾のアパートに滞在する深田絵里子のもとを父親が NHK の集金人として訪れているのではないかと推測する。天吾は意識のない父親に向かって語りかける。

> 「あなたの肉体はここで昏睡している。（中略）でもそれはひとつの見せかけに過ぎないんじゃないか。ひょっとしてあなたの意識は本当に失われてはいないんじゃないか。あなたはここで肉体を昏睡させたまま、意識だけをどこかよそに移して生きているんじゃないか。僕はずっとそういう気配を感じ続けてきた。あくまでなんとなくではあるけれど。」
>
> （中略）
>
> 「突飛な想像だということはよくわかっている。こんなことを誰かに言っても、妄想と思われるのがおちだ。でも僕はそう想像しないわけにはいかない。」
>
> （中略）
>
> 「そういう文脈で話を進めていけば、あなたが意識を肉体から分離しどこか別の世界に映して、そこで自由に動き回っているとしても、とくに不思議はない。（中略）僕には奇妙なちょっとした手応えがある。あなたがそれを実際におこなっているんじゃないかという手応えが。たとえば高円寺の僕のアパートに行ってドアをノックしている。わかるよね？　NHK の集金人だと言ってドアをしつこく叩き、脅し文句を大声で叫ぶんだ。（後略）」
>
> 「僕が求めるのはただひとつ、もうドアをノックしないでほしいということだ。」
>
> （BOOK 3 第 12 章）

『１Ｑ８４』では、「肉体から分離」した父親が、深田絵里子のほか、マンションに潜伏している青豆、天吾を監視している牛河のもとに、NHK の集金として訪問しているようだ。その一方、天吾はその枕元で父親に話しかけても父親は昏睡状態のままである。天吾は次のように考える。

> 父親は何も言わず、身じろぎひとつせず、じっと目を閉じていた。いつもと同じように。しかしそこには何かを考慮しているような気配があった。（中略）父親が出し抜けに目を開け、身体を起こすのではないかという気がした。（後略）。　　（同上）

そのまま父親は息を引き取るが、その死にも謎めいたものが付与している。意識のない父親が自分でナースコールを押して自分の死を看護師に伝えたとしか考えられない、と。また死因もわからない。父親は認知症はあるが健康体であった、しかしなぜか昏睡に陥り意識が戻らないまま死を迎えた。

再び繰り返せば、青豆のマンションを訪れた NHK の集金人は、父親以外の人物である可能性がある。牛河のケースは単なる思い違いの可能性がある。しかし断定できない言説に神秘性が召喚される。さらに小説の構造に目を向けるとき、天吾のこれらの「直感」は、『１Ｑ８４』のもう一人の主人公・青豆の「直感」 と響き合っている。そして青豆の「直観」は「真実」に限りなく近いものとして描かれる。

リーダーを殺害し、マンションの一室に潜伏する青豆は、同志である老婦人、ボディーガードのタマルに「妊娠する心当たりがまったくない」にも関らず妊娠した可能性を伝える。老婦人と青豆とのやりとりを見たい。

> 老婦人は慎重に言葉を選ぶ。「私は前々から、あなたを冷静で、論理的な考え方をする人だと思ってきました」
> 「少なくともそうありたいと私も考えています」と青豆は言う。
> 「にもかかわらず、性交渉抜きで受胎したとあなたは考えている」
> 「そういう可能性があると考えています。正確に言えば」と青豆は言う。「もちろんそんな可能性を思いめぐらすこと自体、筋の通らないことかもしれませんが」
> （BOOK３、第８章）

青豆は、自分の妊娠について「可能性がある」と答えるのみである。タマルも「俺には謎かけのように聞こえる」と返答する。しかし、妊娠検査薬により、青豆による妊娠の推測は正しかったことがわかると、青豆の頭には「出し抜けに」ひとつの考えが浮かぶ。

> 胎内にいるのはあるいは天吾の子供かもしれない。

（中略）
おそろしく突飛な考えだ。まったく理屈が通っていない。どれだけ言葉を尽して説明しても、たぶん世界中の誰ひとり納得させられないだろう。　（BOOK３、第 11 章）

「もし本当に天吾の子供だったら」という考えは、青豆の中で次第にひとつの「事実」となってゆくが「第三者を説得できるだけの論理性」はないままである。

天吾の父親の認知症は、天吾によって「見せかけ」と語られるものである。「突飛な想像」「妄想」と言われようとも、彼は認知症は「見せかけ」に過ぎず父親の意識はある、それが「真実」だと考える。青豆の妊娠の事実も、天吾の直観と同様に論理性はない。

そもそも、『１Ｑ８４』という小説自体、冒頭はこのように始まっていたのではないか。

見せかけにだまされないように。　（BOOK１、第１章）

高速道路でタクシーの運転手は「見かけにだまされないよう。現実というのは常にひとつきりです」という警句を青豆に伝える。すなわち、『１Ｑ８４』において認知症は『１Ｑ８４』の「見せかけ」の世界を召喚するギミックとして機能しているのだ。このような認知症の表現はどのように位置づけられるのだろうか。

４　なぜ認知症というギミックが必要なのか？――『騎士団長殺し』

〈謎めいたもの＝神秘性〉が付与された認知症は、『1Q８４』以外にも事例をみることができる。たとえば、三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』（2006）の冒頭に登場する認知症患者である。

「あんたはきっと、来年は忙しくなる」
年の瀬も押し迫ったある晴れた日の夕方、曾根田のばあちゃんはそう言った。
（０　曾根田のばあちゃん、予言する）

この小説は、東京郊外で便利屋を経営する多田が息子のふりをして、認知症らしき女性のお見舞いをする場面から始まる。「曾根田のばあちゃん」は多田に「商売は今年と変わらない。あんたは自分のことで忙しくなるんだよ」「あとはまあ、旅をしたり、泣いたり笑ったりさ」などと言う。すると、まわりの患者が「やあ、キクさんの予言だ」とはやす。多田は「曾根田のばあちゃん」の予言は、見舞いに来ない息子への息子が愚痴と考えている。だが、この小説を読みすすめると「曽根田のばあちゃん」の予言は的中したことがわかる。その後の多田は、正月の松の内に再会したかつてのクラスメート行天に振り回され、多忙な一年を送る。『まほろ駅前多田便利軒』のこの場面は、認知症の患者が「特殊な力」を持つケースをほのめかしている。

前章で確認したように、『１Q84』では、認知症患者における不可視の「内面」に〈謎めいたもの＝神秘性〉が付与されていた。認知症患者である天吾の父親は、寝たきりながら生霊のように深田絵里子や青豆、タマルを訪問する。認知症患者に「特殊な力」を持たせるケースだといえる。それでは、『騎士団長殺し』における認知症の事例は、どのようなものであろうか。

主人公「私」の友人・雨田政彦は、認知症の父親の頭の中を「今ではほとんど茹でたカリフラワーと変わりない」と述べる。彼の父親は、有名な日本画家の雨田具彦である。雨田具彦は、認知症により高齢者養護施設に入所している。記憶が失われ、息子の顔も思い出せない。その点は『１Ｑ８４』の天吾の父親と同様な設定である。さらに天吾の父親と同じく、雨田は「意識を肉体から分離して」動き回っている。雨田具彦は、ある夜、「私」が借りている家――小田原郊外にある彼が住んでいた家にやってくる。

> それが実物の肉体をそなえた雨田具彦であるわけはなかった。実物の雨田具彦は伊豆高原の高齢者養護施設に入っている。認知症がかなり進行しており、今はほとんど寝たきりの状態になっている。ここまで一人で自力でやって来られるわけがない。
> (41)

「私」は、自分が目にした雨田具彦を「生霊」と呼ぶべきかもしれない、と述べ、そこに「意識の放射」があったと説明する。『１Ｑ８４』では、父親の意識は天吾による「気がする」「可能性がある」という曖昧さの言説のうちに提示されたが、『騎士団長殺し』では、主人公の判断はより確信に近いものとなる。雨田具彦（の生霊）は高齢者施設の病室から抜け出してきたように描出されている。そして、「身内」である息子の雨田政彦も認知症の父親に「意識」があると推測する。「なんだか不思議なものだね。過去の記憶はほとんど消えてしまっても、意志の力みたいなものはまだちゃんとそこに留まっているんだ。それは見ていればわかる。」(37) という。

また『騎士団長殺し』では、雨田具彦の病室で、主人公の「私」が絵画から現れた騎士団長を刺殺し、地底の世界を通り抜けて元の世界に戻る。そして「私」は次の様に考える。

> 「しかしここは本当に現実の世界なのだろうか？」 (57)

「私」は世界を見渡し、見慣れたものを確認し、風の匂いや聞き慣れた音を聞く (57)。しかし、同時にこのように考える。

> でもそれは一見現実の世界に見えるだけで、本当はそうではないのかもしれない。これは現実の世界だと、私がただ思い込んでいるだけかもしれない。私は伊豆高原の穴に入って、地底の国を通り抜け、三日後に間違った出口から小田原郊外の山の上に出てきたのかもしれない。私が戻ってきた世界が、私が出て行ったのと同じ世界であるという保証はどこにもないのだ。 (57)

多くの読者は、この「私」の言説を既視感をもって受け止めるだろう。『１Q84』の主人公・青豆が、天吾とともに高速道路の非常階段を通り通り抜けたあとの考え方と類似しているからだ。青豆もまた現実の世界に戻ってきたのか自信が持てず、「本当にそうだろうか。それほど簡単に世界は元に復するものだろうか？」「ひょっとしてここはもうひとつの違う場所ではあるまいか」と疑念を抱く。

それでは、『騎士団長殺し』の認知症は、小説としてどのようなギミックとして用いられているのだろうか。また『１Ｑ８４』の天吾の父親とはどのような点が異なるのだろうか。それは、雨田具彦が死期が近づいたときに病室で意識を取り戻し「二十代の青年」に戻ろうとしている点であろう。次は、雨田具彦の病室で、主人公と騎士団長と雨田自身が居合わせる場面である。

> 私は席を立って、騎士団長の座っている椅子の方に歩いて行った。そして彼の抜いた剣を手に取った。何が正しいことなのか、何が正しくないことなのか、その判断が私にはもうつかなくなっていた。空間と時間を欠いた世界では、前後や上下の感覚さえ存在しないのだ。私という人間がもう私ではなくなってしまったような感覚がそこにはあった。私と私自身とが乖離しているのだ。　(51)

認知症の症状は、脳の働きが悪化することで記憶障害、見当識障害が生じるが、感情は保持したまま――というのが、現在の定説である。雨田の病室で「私」が経験する「感覚」が、「時間」「場所」「人物」に関する認知が損なわれていること――認知症の症状と相似しており、雨田具彦の意識に入り込む設定になっていることは興味を惹く。雨田具彦の病室では、絵画「騎士団長殺し」に描かれた場面が再現されてゆく。それは、雨田具彦が心の内に封印した過酷な過去――二十代の世界のメタファーとして想定されている。すなわち「私」が病室で巻き込まれてゆく「空間と時間を欠いた世界」は、認知症の表象と分ちがたく結び付いて繰り広げられた小説世界となっていると考えられよう。村上春樹の『１Q84』『騎士団長殺し』は、ともに認知症をギミックとして効果的に使用した小説として注目される。

では、なぜ両小説では認知症がギミックとして必要だったのだろうか。このような問いを持つとき、『１Q84』『騎士団長殺し』は、認知症患者のケアの風景をとして描く〈介護小説〉との差異が現れる。それは、認知症に〈謎めいたもの＝神秘性〉が付与されている点である。天吾の父親も雨田具彦も、認知症になることで、人間業とは思えない行動、現象を生じさせてゆく、あるいはその行動を導く媒体となる。『騎士団長殺し』においては、地底世界を通過した主人公の「私」の行動は、現実の世界から見れば、雨田具彦が入院する伊豆高原の施設から監視カメラに写らないまま「忽然と消えた」ことになる。しかし、「私」の地底世界への通路は雨田具彦から「示唆」してもらったものである。「私」はそのように息子の雨田政彦に伝える。だが彼は「親父が？」「言っていることの意味がわからんな。」と理解することはない。しかし小説内では、「私」が経

験した不可思議な出来事は「昔から一貫して論理的に思考する」隣人の免色によって「信憑性」が担保される。免色は「祠の裏手の穴」の中では何が起こっても不思議ではないと発言する。

『１Q８４』『騎士団長殺し』における認知症は、通常の感覚では共感しにくい不可思議な現象、通常では「妄想」と片付けられるような事柄を召喚するものとして設定されている。そして、村上春樹の小説において、このような設定は、認知症に限定されないことも目を向けるべきだろう。『海辺のカフカ』のナカタさん、『１Q８４』の深田絵里子なども現実世界と異世界、非現実な世界とを繋ぐ媒体者となっている。ナカタさんは国民学校生徒だったとき疎開先で記憶と読み書き能力を失った。知的障がい者の設定である。一方、猫と会話が可能であり、現実と非現実を結び合わせる「入り口の石」を導く者となる。深田絵里子はディスレクシア（識字障がい）を持つ[10]一方、「二十年のあいだ一度も顔を合わせていない」青豆と天吾を繋ぐ。その結果青豆は妊娠し、身籠った胎児は宗教法人のさきがけにとって「声」を聴き続けるための「井戸」となる。障がいを持つ登場人物たちは常人の域を超えた能力を付与されており、天吾の父親や雨田具彦はこの系譜として位置づけることが可能である。とすれば、村上春樹の描く認知症は、非現実の世界を召喚するギミックとして機能しており、認知症としての固有の問題系は希薄であるといえるだろう。

◇

本稿は、『１Q８４』および『騎士団長殺し』における認知症の表象について考察した。最初に、日本近現代の小説における認知症の表象を外観し、認知症患者が他者化され、「内面」が不在とされている様相や、『恍惚の人』の事例のようにケアする側の認知症への畏怖などが主題となっていることを確認した。次に、村上春樹の『１Q８４』『騎士団長殺し』を分析の対象とした。両者ともに、認知症は、通常の感覚では共感しにくい不可思議な現象、通常では「妄想」と片付けられるような事柄を召喚するものとなっており、物語を強固に牽引する装置＝ギミックとなっていた。認知症患者の表象においては、他者化しつつも、患者の内面の存在を示唆していた。一方で、認知症患者における不可視の「内面」に〈謎めいたもの＝神秘性〉が付与され、そこに「特殊な力」を持たせられていた。村上春樹の描く認知症は、非現実の世界を召喚するギミックとして機能するが、それは障がいを持つ登場人物等にも見受けられる機能であり、その点で、認知症としての固有の問題系は希薄であった

ただ、認知症を発症する天吾の父親も雨田具彦も共通して、決してまわりに口外することのない「秘密」を抱き生き続けたという設定は、留意されるだろう。天吾の父親は、戸籍上の記載とは異なり天吾の生物学的な父親ではないこと、画家の雨田具彦は「騎士団長殺し」の絵画を天井に隠し持つ。その「秘密」は、白日の下に晒されることはなく小説は閉じる。天吾の父親、雨田具彦が抱えていた過去＝真実は、二人にとって常軌を逸する精神状態をもたらすような過酷な

---

10 佐々木亜紀子はアウトサイダー・アートとして『１Q84』に登場する障がい者がに注目し、深田恵理子の「声」やタマルの少年院時代の少年の「木彫りのネズミ」を事例としてあげている（「アウトサイダー・アートをめぐる小説　村上春樹『１Q84』・小川洋子『ことり』、佐々木亜紀子・光石亜由美・米村みゆき編『ケアを描く　育児と介護の現代小説』七月社、2019 年所収）。

出来事であったようだ。天吾の父親は認知症にならなければ「真実」を語ることができなかった、言い換えれば、認知症になることで「真実」を口にすることができた。雨田具彦が隠し持つ絵画は「自ら血を流し、肉を削るようにして描いた」「流されてきた多くの血を浄めるための作品」であった。だとすれば、『１Ｑ８４』『騎士団長殺し』で描かれた認知症の設定は、「真実」を導く通路であること、心の澱から解き放されること＝救いが示唆されているのであろう。雨田具彦が口もとに「微笑み」に似た表情を浮かべて生を全うしたように。「魂を沈め、落ち着かせ、傷を癒す」『騎士団長殺し』の絵画のように。

【米村みゆき（日本近現代文学、アニメーション文化論）】